

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 2013 年 5 月 31 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520818

研究課題名（和文） 社会主義中国におけるエスニック・ジェノサイドに関する実証研究

研究課題名（英文） Anthropological Studies about Ethnic Genocide in the Socialism China

研究代表者

大野 旭（楊 海英 OHNO AKIRA=YANG HAIYING）

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40278651

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会主義中国の中国人たちが1949年以降に国内に住む少数民族を対象におこなってきた大量虐殺の歴史を、文化人類学的手法に基づいて究明しようとするものである。中国政府と中国共産党は「民族の消滅」との理念を物理的にも実現するために1959年にチベットに侵攻し、チベット族虐殺事件が起こった。1966年から1976年にかけてはまた、モンゴル族大量粛清運動（内モンゴル人民革命党員粛清運動）が発動された。そして、1975年8月には雲南省ムスリム（回族）が大量虐殺される事件が発生した。この三つの大量虐殺事件は相互に連動し、そのまま中華人民共和国の建国後の歴史的歩みとも重なっている。本研究は現地において生存者たちから当時の状況について聞き書きをし、関連する第一次資料を収集し、公開できた。

研究成果の概要（英文）：

Socialists have upheld the “elimination of National boundaries together with ethnic identities” as their goal, persistently fighting for it. In China, the Chinese Communist Party schemed to bring about the “elimination of National boundaries together with Ethnic identities” by means of violence, a practice in which it was highly skilled. Because the Inner Mongolia Autonomous Region (IMAR) and Tibet was placed under Chinese rule after WWII, the massacre of Mongols and Tibetans broke out in that region. This study discusses, from the perspective of ethnic genocide, the “incident of the massacre of members of the Inner Mongolian People’s Revolutionary Party (IMPRP)” which took place in the IMAR between late 1967 and early 1976 against the background of the Cultural Revolution. The other case is that, The Tibetan genocide during 1958-1959; and The Huizu(Muslim) genocide in 1975, Yunnan Province. A study of the “Ethnic genocide” reveals the essential characteristics of the government policies of socialist China towards ethnic minorities, which are autocratic as well as violent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：民族問題・文化大革命・社会主義・モンゴル・チベット・回族・イスラーム・ジェノサイド

1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀は「虐殺と戦争の世紀」であった。アルメニア人大量殺害に端を発し、ナチス・ドイツによるホロコーストを経て、ジェノサイドが世界各地で発生した。1948年12月9日に国連で『ジェノサイド協定』が採択され、殺戮行為を永遠に断つ、と人々は誓いあった。にもかかわらず、冷戦終結後に旧ユーゴスラビア連邦内で発生した諸民族同士が血で血を洗う「民族浄化」や、アフリカ各地の紛争における大規模な虐殺などは負の遺産として人類に影を落とし続けてきた。

(2) 従来から知られている上述の如き大量虐殺だけではなく、中華人民共和国や旧ソ連邦といった社会主義諸国には更に深刻な「隠され続けているジェノサイド」が複数存在している。この隠蔽されている大量虐殺はそのまま社会主義諸国の民族問題の本質を成している。中国のエスニック・ジェノサイドは社会主義独裁体制に起因するのみならず、「先進的な中国人(漢民族)対立ち遅れた野蛮な少数民族」という歴史的な対立と差別の構造とも関係している。中国における「少数民族大量虐殺」の歴史を綿密に記録し、その結果と影響を分析し、民族問題発生 of 理論的究明に資することを本研究は目指してきた。

(3) 「中国的特色を有し、社会主義の調和的社会」の実現を標榜する共産党政府は少数民族虐殺そのこと自体を否定し続けている。当然、政府側からの資料公開や公認研究は皆無に近い。一方、在野の研究者や当事者たちは虐殺の事実と歴史を海外やインターネット上で発表している。例えば、北京在住のチベット人ワイサー(唯色)が2006年に台湾から出版した『西藏記憶』は、1959年から発生し

た一連のチベット人大量殺戮を経験した人物たちの証言集である。同じく台湾から出た同女史の『殺劫』(日本語版は集広舎)は、人民解放軍の従軍記者だった父親が残した写真をベースにしたもので、世界にチベット人ジェノサイドの真実を映像資料で以て伝えている。

内モンゴル自治区に住むモンゴル人アルタンデレヘイの著書『内モンゴルの大粛清』(『内蒙古挖肃災難実録』、1999年)は、地下出版の形を取るが、中国内外で広く読まれ、インターネット上にも公開されている。著者は政府が設けた被害者たちを受け付ける機関に勤めたことがあり、その際に集めた被害者からの陳情の資料等を用いて、モンゴル人ジェノサイドの実態を暴いている。

雲南省の回族研究者の馬紹美は1989年にいち早く同省沙甸地域で1975年8月に起こった人民解放軍による回族ジェノサイドの惨状を『沙甸回族資料』(内部資料)にまとめている。回族の作家張承志は『回教から見た中国』(1993年、岩波書店)で沙甸虐殺事件を日本社会に発信している。

本研究の代表者は1990年代からモンゴル族とチベット族居住地域、2000年からは回族の分布地域において現地調査をし、被害者たちが記録し、中国で公開できない資料類を多数集めて、公開してきた。また、大量虐殺の経験者たちの証言に依拠した民族誌を公開出版している(楊海英『墓標なき草原』上・下、2009年、岩波書店)。現代中国によるエスニック・ジェノサイドについては、日本の研究者たちが正面から「当事者たちの声と資料」の収集に取り組むことが、現地の人々からも期待されている。

2. 研究の目的

(1) まず、少数民族大量虐殺の経緯をリアルに再現する。中国政府が実施したエスニック・ジェノサイドは、社会主義制度特有の閉鎖性から、今日も尚、嚴重に隠蔽され続けている。その為、最も有効な手段として、被害者ら当時の歴史を経験した人たちからの口承資料の収集と記録が不可欠である。当事者たちの証言と文字記録類に依拠して、1958年から1976年まで続く一連の大虐殺の歴史を現代国際関係史の脈絡のなかで、民族誌(史)の形で再構築する。

(2) エスニック・ジェノサイドの国家的背景を探求する。大量虐殺の背景には国家としての社会主義中国がある。大虐殺は国民国家が主導した暴力行為で、国家そのものへの注目は避けて通れない。「プロレタリアート独裁」と称する社会主義国家の権力が殺戮の手段たる暴力として作動していく過程で、「漢民族人民の力量」が如何に煽動され、形成されていったかを検証しなければならない。その為には、中国政府が発行していた公文書(檔案・文件類)を蒐集し、詳細に分析する必要がある。これは、エスニック・ジェノサイドの政治的背景を究明するのに欠かせない資料群である。

(3) 民族問題発生 of 理論的根源を探る。「資本主義よりも進んだ社会主義においては、民族は消滅する」か、あるいは「民族問題もつまるところ、階級闘争だ」、と毛澤東ら中国共産党の指導者たちは宣言していた。少数民族虐殺は「民族の消滅」を物理的にも実現させようとした試みだ、との見解がある。それでも「民族問題」は中国から消えようとしていないのが現実である。社会主義イデオロギーと民族問題発生との関係について、実証的手法からアプローチする。以上のような調査

研究から得た成果を学術書や資料集にまとめて、公開出版する。

3. 研究の方法

(1) ジェノサイドは今日、「民族紛争」とも連動し、世界各地で発生している現実から、文化人類学者たちに早急な対応が求められている(栗本英世『民族紛争を生きる人々』、1996年、世界思想社)。「民族問題」にエスニック・ジェノサイドが伴われていた事実から、現代中国における少数民族の大量虐殺に対する実証研究は喫緊の課題である。

(2) 大量虐殺を研究してきた社会史学者や歴史学者らは鎖国を続ける社会主義諸国に入れなかったゆえに、ジェノサイド研究において中国の具体的な事例が不足していることを嘆いている。これに対して文化人類学は「中国の少数民族研究」という領域において既に膨大な蓄積がある。従来の「少数民族文化研究」の学術的蓄積はエスニック・ジェノサイドの文化的・歴史的背景究明に有用であった。

(3) 「当事者側の視点に立つ」ことを重視する人類学者は容易に殺戮の存命者たちに接近できる。文字資料だけでなく、オーラルヒストリーの発掘と再構築を得意とする人類学の基本的手法は、今も尚隠蔽され、否定され続けているエスニック・ジェノサイドの実態を掘り起こすのにきわめて有効であった。

(4) 具体的な現地調査は主として以下のような計画に沿って実施してきた。まず、平成22年度には中国青海省・甘肅省に入って、1950年代の「チベット反乱」の経験者や関係者にインタビューをし、第一次資料を集めた。平成23年度には内モンゴル自治区において、モンゴル族大量虐殺に関する証言を記録した。最終年度の平成24年度には中国南部の雲南省に赴き、イスラーム教徒弾圧と虐殺の

実態について調べ、資料を集めることができた。

4. 研究成果

中華人民共和国という抑圧的な社会主義国家を絶対的な悪とし、少数民族側を善とする立場を本研究の代表者は取らない。「民族」という存在は虐殺の当事者であると同時に、原因ともなりうる。「全人類の解放」や「世界革命」を目標に掲げていた社会主義国民国家の独自の「民族理論」が、如何にしてジェノサイドの発動と結びついたかの根本的な原因を歴史の脈絡の中から抽出しなければならない。

社会主義陣営の中で、ジェノサイドは中国にのみ存在していたのではなく、旧ソ連邦やカンボジアなどにも発生していた事実がある。中国の場合、エスニック・ジェノサイドは、常に国家側あるいは主要民族の漢民族側からの一方的な殺戮という形で展開されてきたことが明らかになった。

国際的な視野に立つと、中国はまた諸外国に対して、「革命の輸出」を積極的に進め、その結果としてカンボジアではポル・ポト政権による大虐殺が発生した。インドやネパール、そして南米諸国における左翼陣営によるテロ活動も毛澤東の思想を受けてきた。更に、近年の旧ユーゴスラビア連邦解体後の「民族浄化」もその社会主義的な現代史やイデオロギーなどと無関係ではない。地球の約半分を占めてきた共産圏に多発するジェノサイドと民族問題・民族紛争との関係究明に繋がる成果を世に送ることができた。本研究の成果は、20世紀に起こったエスニック・ジェノサイドに関する研究と総括は、我々人類が猛省をしたはずの「虐殺と戦争」の根絶を如何に実現させるかにも寄与することとなる。

「ジェノサイドは、人道に対する犯罪だ」と国連は1948年12月に位置づけている。人類

学はジェノサイドの実態究明を通して、人道と平和構築にも貢献することとなる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 楊海英、沙甸村の殉教者記念碑、中国21(愛知大学現代中国学会)、査読有、Vol.37、2012年、227-234
- ② 楊海英、從天幕到宮殿—成吉思汗廟及成吉思汗陵的殖民化作用、民族学界、台湾国立政治大学民族学系、査読有、31期、2013年、199-218
- ③ 楊海英、殖民地支配と大量虐殺、そして文化的ジェノサイド—中国の民族問題研究への新視座、思想、岩波書店、査読有、No. 1060、2012、140-155
- ④ 楊海英、モンゴル帝国の遺産—モンゴル語系ムスリムの今昔、中国ムスリムを知るための60章、中国ムスリム研究会編、査読有、2012、51-55
- ⑤ 楊海英、以“肉体的消滅”實現“民族的消亡”—從民族大屠殺(genocide)的角度看内蒙古自治区的中国文化大革命、民族学報、台湾国立政治大学民族学系、査読有、2011、1-23
- ⑥ Ohno Akira(Yang Haiying), A Genocidal Campaign in Southern Mongolia During the Chinese Cultural Revolution (in Mongolian), *Mongolia – Japan in the Past and the Present: Focusing on the 20th Century* (the Third International Symposium in Ulaanbaatar) organized by The Mongolian Academy of Sciences-Institute on International Studies. 査読無、2011、Pp266-330
- ⑦ 楊海英、遊牧民からみた〈文明の生態史観〉、梅棹忠夫—地球時代の知の巨人(文芸別冊、河出書房新社、査読無、2011、137-143

- ⑧ 楊海英、西部大開發と文化的ジェノサイド、中国 21(愛知大学現代中国学会)、査読有、34号、2011、117-134
- ⑨ 楊海英、“中華民族”概念的再創造和蒙古民族史的再改写、人文論集(静岡大学人文学部)、査読無、61卷1・2号、2011年、1-14
- [学会発表] (計 11 件)
- ① 楊海英、社会主義者ウラーンフーの牧畜政策と中国との相克、アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究主催国際ワークショップ「ユーラシア乾燥地における遊牧民の定住化と社会主義、2013年4月13日、名古屋大学
- ② 楊海英、早すぎた〈文明の衝突〉?—民族主義者・社会主義者ウラーンフーの牧畜政策と中国との相克、愛知大学国際中国学研究センター(ICCS)政治・外交的アプローチ班主催『三つの世代を超えて見えて来るもの:文革世代、六四世代、そして八〇後世代へ、2013年2月23日、愛知大学
- ③ Ohno Akira(Yang Haiying), “Historical Memories and the worship of Chinggis Khan”, in “Chinggis Khaan and Globalization”, International Academic Conference organized by the President of Mongolia, Tsashia Elbegdorj, Celebration of the 850th birthday anniversary of Great Chinggis Khaan, 04,11,2012,Mongolia Uaanbaatar
- ④ Ohno Akira(Yang Haiying), “Mongolian Genocide and the Chinese Cultural Revolution”, in the International Conference “World of Central Asia”, Institute for Mongolian, Buddhist and Tibetan Studies of the Russian Academy of Sciences (Siberian Branch), 19,09,2012,Russia,Ulan Ude
- ⑤ 楊海英、從天幕到宮殿—成吉思汗廟及成吉思汗陵的殖民化和其作用、第五回日台

- 原住民族研究フォーラム、2012年8月26日、台湾屏東原住民文化園
- ⑥ 楊海英、中国文化大革命とモンゴル人ジェノサイド、現代中国研究会、2012年7月28日、佛教大学四条センター
- ⑦ 楊海英、今も続く植民地支配と戦後体制の見直し—フォーラム、日中戦争の勃発と東アジアのその後も考えよう、植民地文化学会、2012年7月7日、早稲田大学
- ⑧ 楊海英、早すぎた〈文明の衝突〉?—社会主義者ウラーンフーの牧畜政策と中国との相克、日本文化人類学会第46回研究大会、2012年6月24日、広島大学
- ⑨ 楊海英、レンズのなかの〈遊牧図譜〉—梅棹忠夫モンゴル研究資料内の和崎洋一撮影写真をよむ、国立民族学博物館共同研究+日本科学未来館・国際シンポジウム『アーカイブズの未来:梅棹忠夫モンゴル資料の学術的利用から考える』、2012年2月12日、日本科学未来館
- ⑩ 楊海英、植民地支配と大量虐殺、そして文化的ジェノサイド—中国の民族問題研究への新視座、中国ムスリム研究会10周年記念大会、2011年12月18日、早稲田大学
- ⑪ 楊海英、北狄で以て西戎を制す?—1958年のチベット人蜂起を鎮圧したモンゴル人騎馬部隊の記憶と記録、日本文化人類学会第45回大会、2011年6月11日、法政大学

[図書] (計 6 件)

- ① Yang Haiying, afro-urasian inner dry land civilization collection 5), Comparative Studies of Humanities and Social Sciences Graduate School of Letters, Nagoya University, *Ulanhu, A Nationalist Persecuted by the Chinese Communists — Mongolian Genocide during the Chinese Cultural Revolution*, 2013,p102

- ② 楊海英編、風響社、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 5ー被害者報告書(1)』(内モンゴルの文化大革命 5), 2013年、794 頁
- ③ 楊海英編、風響社、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 4ー毒草とされた民族自決の理論』(内モンゴルの文化大革命 4)、2012 年、936 頁
- ④ 楊海英著、岩波書店、『続 墓標なき草原ー内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』、2011 年、336 頁
- ⑤ 楊海英編、勉誠出版、『王朝から〈国民国家〉へー清朝崩壊 100 周年』(『アジア遊学』148)、2012 年、148 頁
- ⑥ 楊海英編、風響社、『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 3ー打倒ウラーンフー(烏蘭夫)』(内モンゴルの文化大革命 3), 2011 年、1087 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 旭 (楊 海英 ONNO Akira=YANG Haiying)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：40278651

(2) 研究分担者

該当者なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当者なし ()